



『アズ・ワン』 上:スティーヴン・マクレイ、右:崔由姫  
Photos: Bill Cooper

ロイヤル・バレエが最新のトリプル・ビルで上演した3作品は、いずれも過去2シーズン以内の新作。苦悩という重いテーマをそれぞれに取り上げながら、ダンサー、美術、音楽、そして振付そのものに、随所で目を見張らされた。

私たちは、めまぐるしく変化する社会の中で感情の機能不全を起こし、報われない愛や神経衰弱に苦しみながら生きている。先端技術に弄ばれ、精神は蝕まれている——というのが、公演から受け取れるメッセージだ。誰もがこの主張のどこかに、身につまされるものがあるはずだ。舞台上でそれらが提示されるのを観るのは、自分とのかかわりを認識する方法としては悪くない。

最初の作品は、ジョナサン・ワトキンスの『アズ・ワン(As One)』。ワトキンスは過去にロイヤル・オペラハウス内の小ステージで作品を発表したことがあるが、メイン・ステージでの上演はこれが初めてだ。大劇場の規模にふさわしい作品だったかどうかについては議論の余地もあるが、才能についていえば、ワトキンスにはそれがあると思う。着想は少々野心的すぎるが、構成要素を組み立てる手法が印象的なのだ。都市の生活をテーマとし五部からなる作品は、まずグレアム・フィットキンに委託した音楽が良く、全体を通じてステップに勢いと力を与え続けていた。何枚ものスクリーンにオフィスでの退屈な日常を描き出したサイモン・ドーの美術も、うれしいボーナスと呼べるものだ。ワトキンスの構想は、現代人の生活の断片を拾い上げて緩やかにつないでいき、最後に全体を一つにまとめ上げるというもの。どうにも盛り上がらないホーム・パーティ、テレビのザッピングに一日の大半を費やしているカップル、相手を見下して悦に入る若者たち、自分探しに血眼の若い女性。そして最後に、シティの金融街で働き、競争社会の中でもがく若い男性が登場する。

キャストがすばらしく、特に二十一世紀の都会派青年を演じたスティーヴン・マクレイは、目の覚めるようなスピードで動き回り、このダンサーならではの力量を示した。何か注文を付けるところがあるとしたら、彼の出演場面が特に面白みのあるものではなく、また造形しづらい役どころだったことくらいだろう。演技の大部分が親密すぎて、大舞台には不向きだったのだ。振付の語彙は、ダンス・クラシックを基本にしたステップの間によりコンテンポラリー的な動きをちりばめてたいへん面白かったが、どの場面も舞台の一部でしか展開しないという問題があった。ホーム・パーティでは何かが起こるのは台所の流し

## 4月号の主な記事

今月号の日本語ページでは、コヴェント・ガーデンで行われたロイヤル・バレエのトリプル・ビルの公演評を全文ご紹介します。



評: デボラ・ワイス  
翻訳: 長野由紀

台の周りだけ(一般的に、これでは盛り上がらない)。カップルの場面に出てくるのはエドワード・ワトソンとラウラ・モレーラ(二人とも秀逸)の他には画面のちらつくテレビが一台だけ。そしてマクレイは、同じ対角線上を何度も跳びながら行きしてばかり。彼らが限られたスペースだけでなく、舞台全体を使い切る様子を見たかと思う。だが全員が揃った場面では状況が一変、たいへん見事だった。まだ才能が開花しきってはいないものの将来性を感じさせる振付家の、デビュー作を高く評価したい。

キム・ブランドストラップの『ラッシュー失われた物語の断片(Rushes – Fragments of a Lost Story)』は、陰鬱だが興味をそそられるところの多い作品だ。花火のように高揚するわけでも、終演後に爽快感が残るわけでもない。にもかかわらず、舞台上で繰り広げられた人間関係の力学について、私たちは思索しつづけることになるのだ。男は一人の女性を愛しているが振り向いてもらえず、彼を愛する別の女性が辛抱強く待ち続けるという物語。主役の男性役のカルロス・アコスタは、いつもどおり確信に満ち強い磁力を感じさせた。彼が惹かれる女性はモレーラ、誘惑者であり、男の賛美の視線を受け入れるものの、あまりにも熱い求愛に結局は彼を拒絶する役を、じつに繊細な解釈で演じた。耐え抜いた末に愛を勝ち取るアリーナ・コジョカルの姿に、観る者の心は大にかき乱された。パド・ドゥはいずれもよくできており、人物描写にもたいへん深みがある。アンダーステイトメント(控え目ゆえに、かえって確固たる印象を与える主張の仕方)の、完璧なお手本といえる。

プログラムの最後を飾ったのは、ウェイン・マクレガーの『インフラ(Infra)』。舞踊批評家協会賞の最優秀振付賞を受賞したこの作品が私は初演の時から好きだったが、今回さらに好きになった。音楽(マックス・リヒター)、舞台美術(ジュリアン・オウピー)、照明(ルーシー・カーター)の魅力もあいまって、見るたびに魅力的に思える。それはつまり、時の試練に耐えて上演され続ける予感がするということだ。実際の舞台の出来栄も、望みうる最高のレベルだった。驚異的な力量のキャストの中でも、今年度の舞踊批評家協会賞最優秀女性ダンサー賞(クラシック部門)を受賞したメリッサ・ハミルトンとエリック・アンダーウッドのダイナミックで圧倒的な動きは、屋根の上に乗って叫びたくなる衝動を覚えるほど。またサラ・ラムが絶望して声もなく悲鳴を上げるときの絶妙な表現は、神経にじかに触れられたような痛切さを喚起した。『インフラ』は永遠に見飽きることのない、五つ星のエンターテインメントだ。